

生理学者横山正松と戦争（下）

福島県立医科大学人間科学講座 末永 恵子

国立北京大学医学院

国立北京大学医学院は和平門外後孫公園7号に、附属病院は西城の中央地区の西单背陰胡同にあった。基礎医学部は、1941年（昭和16）4月、北京西四大紅羅廠に校舎を新移転した。

福原武は、既にその日本人教官のひとりとして、1938年（昭和13）11月、国立北京大学医学院の教授に就任していた。

福原のもとに助手として赴いた正松にとって、北京は青春の新天地となった。次のように回想している。

北京はほんとうに美しい街だった。景山に登り、紫禁城や街全体を初めて見た時、私の脳裏にベートーベンの曲が鳴り響くような感じを覚えた。日中戦争の最中であつたが、中国人は我々に寛大であり親切だった。福原教授と私は物資不足であつたが、心臓と小腸の実験を猛烈にやった。心臓房室基部自動中枢、小腸運動、心臓神経の研究で成果をあげた。福原教授の指導で、クロード・ベルナルの「実験医学序説」を数年にわたって輪読し、実験方法から哲学的考察にいたるまで徹底的に議論をした。中国人男女学生との交流もあり、私の生涯の中で最良の時、正に北京好日であつた [1]。

『国立北京医学院雑誌』には、「ひきがへるの心室に就いての力学的研究」(福原)、「ひきがへるの剔出心臓の灌流液について」(福原)、「犬の心房の一新自動中枢」(福原)、「ひきがへるの心臓促進神経作用の季節的変動」(横山) など、研究の成果が発表されている。この北京での研究成果は、正松が新潟医大に提出した博士論文“Jahreszeitliche Schwankungen der Sympathikuswirkung auf das

Krörenherz. I. Mitteilung” に結実した。

中国人との交流

正松の目に、「寛大」で「親切」であると映った周囲の中国人は、被占領地の民族の処世術としてそうならざるを得ないという側面もあつたであろう。

正松にとって「北京好日」であつた時期も、北京住民にとっては、日本による占領の日々であつた。占領は日本敗戦まで約8年間続いた。傀儡政府、警察局や憲兵隊の実態、監獄での待遇、皇民化教育の現場、劣悪な食糧や文化生活など、北京に当時生活していた中国人たちが、占領の日々を詳細に綴った回想録『北京の日の丸一体験者が綴る占領下の日々ー [2]』がある。それを読むと、征服者である日本人に対する怖れと憎しみ、そして抑圧されたナショナリズムがマグマのように心の底に燃えたぎっていたことを知ることが出来る。



国立北京大学医学院時代（『いいじ正松』口絵より）

る。

1939年にこの地を訪れたドイツ人ジャーナリストのコリン・ロスは、次のように北京の状況を解釈している。

臨時政府が日本軍なくしては一日も維持されないことは当然である。そのことは子どもでも知っている。それにもかかわらず、臨時政府が日本の銃剣のお世話にだけなっていると主張するわけにはゆかない。さらにこの臨時政府に仕えている中国人をすべて売国奴とも呼べない。この臨時政府の閣僚に収まるか、あるいは夜警として勤務するかはいつでもいいことであり、ひたすら生活問題が重要な役割を演じている [3]。

日本軍の占領下の抑圧の中で、北京に生活せざるを得ない人々の中には、意に染まぬ協力や妥協を何らかの形で余儀なくさせられた者も多くいたであろう。

北京大学は、1919年の五四運動の策源地であり、反帝国主義活動の伝統があった。したがって、排日的・共産主義的活動を実践して、大学を離れた者が多数いた。しかし、一方でさまざまな事情で大学や北京を離れなかった者もいた。残った中国人も、日本人が実権をもった大学の体制について、もろ手を挙げて歓迎していたとは考えにくい。苦渋の選択を余儀なくされた者、複雑な感情を秘めた者の存在については、想像に難くない。

しかし、上記のような環境とは別に、正松個人の周辺の限られた範囲での中国人との交流が、後年まで印象を残す親しみや敬愛のこもったものであったことも確かであろう。正松は、女子医学生の大塚から中国語を教わり、正松は王に日本語を教えたという。また、抗日運動地下活動のために大学を去る学生たちの中には、正松に離別の挨拶をしていった者が何人かいたという [4]。

結 婚

高等女学校に在籍していた名塚ムツのもとに父からの手紙が届いた。1943年（昭和18）10月21日頃である。手紙には、ムツと正松との結婚を横山家と名塚家の双方の親同士で取り決めをした

ことが記され、正松の写真も同封されていた。さっそく、父は同月31日に学校中退の手続きをとり、ムツを迎えにきた。11月2日には結納、翌日3日には結婚式を挙げるという素早さであった。式の後には、北京での仕事もあるためゆっくりすることもできない。11月16日、新潟港から朝鮮半島の羅南に向かう船で出航した。それまで大陸に渡るために一般的に使われていた山口県下関と釜山を結ぶ関釜連絡船（崑崙丸）は、前月の10月5日にアメリカ海軍の潜水艦ワフーの魚雷直撃を受け沈没、死者行方不明者583名を出していた。そのため不通になっていたのである。朝鮮半島の羅南上陸後、吉林省図們、新京（現長春）、奉天（現瀋陽）、山海関を経て北京に着いたのは、11月23日であった。

応召と生体実験拒否

突然大学での生活に転機が訪れた。1944年（昭和19）2月10日召集令状が来て応召を余儀なくさせられたのである。同月1日に副教授に昇任したばかりであった。彼は、軍医として、北京の天壇に本部があった北支那防疫給水部に入隊した。出征前に、北京大学の宿舎に残る身重の妻へ「部隊は給水班だからたぶん戦線には余りゆかぬ」と言っていた [5]。

生体実験の命令が下った時のことを、正松は次のように記している。

入隊式の折、部隊長から人体実験を命ぜられた。「君が大学でやっていた腹窓法（動物の腹にセルロイド膜をはり、小腸運動を観察）を人体に応用し、歩兵銃で腹部貫通をやれ。銃弾が腸を貫通しても、腸内容がもれぬようにするには、いかなる薬を利用すればよいか、すぐ実験せよ。野戦で敵弾を腹に受け、急性腹膜炎を起こして死ぬ兵隊が非常に多い。これを防ぐためだ」

私は即座に川村先生のことばを思い出し、「人命を損なう、そのような実験はやりません」と答えた。部隊長は激怒し部屋を出て行った。当時上官の命令は天皇の命令であり、絶対服従が軍のおきてであった。私は軍法会議に回されるかと思った

が、そのことはなく間もなく河南省、さらに湖北省の最前線に派遣された [6].

正松が入隊した北支那防疫給水部 (北京甲 1855 部隊) とは、どのような部署だったのであろうか。陸軍軍医大佐で第 3 代目の部隊長の西村英二による『北支那防疫給水部業務詳報 (業詳第十一号)』によると、北支那防疫給水部は、北支那方面軍司令部の直轄下にあり、本部を北京に置き、他に支部・出張所を 12 カ所配置し、これによって華北地域全般にわたる防疫と給水業務を担当するとしている。この他、防疫給水に関する教育や調査研究、各種予防剤、治療剤の製造補給や特殊伝染病患者や、一般伝染病患者の収容・治療などを行うと述べている [7].

北京の本部には、第 1 課から第 3 課に分かれた研究専門部門が置かれていた。先述の『業務詳報』では、第 1 課の業務分担は、「細菌」「結核」「培地」「菌株」「血清」「BCG」「病理解剖」など、第 2 課は、「ワクチン」「血清」「検索」「痘病」「培地」など、第 3 課は、「研究室」「特別研究室」「調査室」「生産室」となっている。

しかし、元部隊員の証言によれば、部隊内ではペストノミの生産が行われた [8]. それは、1943 (昭和 18 年) 頃から本格化していたという。このノミや小動物を繁殖させるための大規模設備があり、また、部隊撤退後の遺留品には、強毒ペスト菌株の入った試験管があった [9]. これらは、細菌兵器製造を前提としていたと考えられる。

そして、生体実験のために中国人捕虜を連行していたことについても、次のような部隊員の証言がある。1944 年 (昭和 19) 夏過ぎ、この部隊員は豊台の捕虜収容所から第 3 課に捕虜を連行するときの警備を命じられた。連行は 3 日に渡って、それぞれ 6 名、5 名、6 名と中国人捕虜が連行された。捕虜は、足枷はしていなかったが手錠をかけられていた。第 3 課に到着すると、監獄に仕つらえた部屋に入れられた。最初の日に 6 人を連れてきたが、その日だったか翌日だったか、本部から 2 人の軍医がやってきた。1 人ではやられてしまう恐れがあるので、2 人で入った。白衣を来た軍医は、捕虜に注射を打った。注射がどのような種類のも

のだったかは不明であるが、注射してから 1 日もしないうちに、彼らは弱っていった [10].

衛生兵であった伊藤影明も、1944 年 (昭和 19) 11 月と 1945 年 (昭和 20) 第 2 月、第 3 課の構内に嚴重に幌をかぶせたトラックが入り、中国人捕虜を連行した場面を目撃している。捕虜が連れ込まれた 3 階の奥には、許可無く立ち入りが禁止された。そのうち、ある軍医に呼ばれ「ペスト菌を注射してあるのだが、ちょっとお前見てこい」と言われ留置所の覗き穴のような所から中を覗いた。その時、偶然にその捕虜と眼があった。その時のうらめしそうな様子、お前もか、というような様子、そのことは、復員してきて何年たっても夢に見るといふ [11].

以上のように、北支那防疫給水部の本部については、その全容ははまだ不明ながらも、細菌戦部隊として、細菌戦のための生体実験を行っていたことは、ほぼ確実とみてよい [12]. そして、中国人捕虜を対象にした生体実験の内容は、細菌戦に向けたものであるとのみ考えられていた。

しかし、正松に課せられた腹部貫通実験のような例から、捕虜は細菌実験だけでなく他の分野の実験対象にも想定されていたと見てよい。この場合、西村部隊長が正松に期待したのは、腹部に銃弾を受けても内容物が漏れ出ないようにする薬の開発であった。まさに、傷兵を致命傷から救う実践的軍陣医学である。日中戦争時の病気を除く戦傷および戦死の原因のトップは、表 1 のように銃創であった。

正松は、西村隊長の実験要請を、即座に拒否した。川村麟也の言葉を思い出したからであると言う。

正松の命令拒否は、新潟医大の同級生で、当時防疫給水部に所属していた軍医大橋義臣の耳にも達した。大橋は、正松の妻を訪ねて「横山は上官に、『支那人の捕虜がたくさん居る。お前は犬の腸に窓を作って腸の運動の研究をしているそうだから、捕虜の腹に窓を作って実験せよ』と命令されたが、それを拒否したそうだ」と告げたという [14].

正松は、軍法会議にかけられることを覚悟した

表1. 中国大陸（旧「満州」を除く）における戦死戦傷の原因調査

区分	戦死（実数）	戦傷（実数）	戦死傷計（実数）
銃創	67,681	148,298	215,979
砲創	9,778	51,004	60,782
爆創	7,110	27,548	34,658
白兵創	808	1,195	2,001
その他	2,268	15,766	18,034
計	87,643	243,811	331,464

「支那に於ける戦死戦傷の原因別調査」より作成 [13].（「調査期間は支那事変を主とする」とある）



作戦地での検水（池田弘「走馬灯」『鄭州 OB 会報』9, 1982年, p.14）

というが、それはなかった。しかし、研究部門を外され、北支那防疫給水部の支部がある河南省の鄭州へ派遣された。そして南陽へ、そしてもっと奥地の大王宮へ派遣され、そこで敗戦をむかえた [15]。

正松自身は派遣地での任務の内容については書いていないが、正松が属した鄭州 BO 会の戦友は、業務について回想している [16]。その内容は次のようにまとめることができる。

1. 作戦地で軍隊が使用する水源の水質検査(濁度・透明度・硬度・アンモニア・青酸・砒素・昇

汞について検査し、飲用に適するか否かを調べる)。

2. 濾水機によって浄水をつくり、搬水車で戦線に給水する。

3. 将兵へ予防注射接種を行う。

4. 部隊における伝染病発生の際の検疫、患者の隔離・保護を行う。

おそらく、正松は1944年（昭和19）4月17日より開始された京漢作戦の戦闘に参加した部隊および作戦後に新たに占拠した地域の部隊への防疫給水業務に従事していると思われる。この作戦は、中国大陸を南北に打通して南方との交通線を確保する目的があった。北支那方面軍は、5月25日洛陽を占領し、京漢作戦自体は成功裡に終わった [17]。だが、その戦場の惨状を正松はつぶさに見て、中国人の日本軍に対する憎しみの深さを知ったという。

私も黄河と揚子江の間の河南省に2年近くらいたのであるが、日本軍に襲われた町の惨状を忘れることが出来ない。長岡か小千谷位の町が戦争にまきこまれると、無数の家が破壊され、屍体はあちこちに散乱し、屍臭が漂い、残った家屋は日本の兵隊の略奪に合った場合は徹底的に荒らされていた [18]。

空襲によって一挙に家を破壊され、十人位の家族を失った生き残りの中国人が、万斛の恨をこめて私達日本軍人をにらんでいた顔付を私は忘れることは出来ない [19]。

中国共産党が勢力を著しく拡大した地域も出て

きていた。すでに、太平洋方面の戦局は悪化の一途を辿っていた。敗色が濃くなったこの時期、前線における生命の危険は高まった。正松は、立ち小便していて銃の弾が頭をかすりそうになったり、畑を歩いていたら敵の飛行機が来て、頭上から機関銃掃射されて、弾を避けながら逃げまどったりしたという [20]。

1945年(昭和20)8月19日に召集を解除され、その後、南陽・許昌・鄭州・新郷・開封・徐州・天津を経て、約千キロメートルの道のりをほとんど徒歩によって、妻と前年に誕生してまだ顔も見ぬ長女の待つ北京へ12月10日に帰還した。既に国民党軍と共産党軍との内戦は始まっており、その戦闘地域を避けて縫うようにしてたどり着いたのだった [21]。

12月末、北京天壇の陸軍病院に入院していた旧友の大橋義臣を見舞った。彼は、正松が生体実験を拒否したことを妻に知らせた人物である。大橋は、731部隊の創始者石井四郎が1942年(昭和17)8月に第一軍軍医部長時代、副官を務めた。北京の北支那軍防疫給水部本部からの第一軍の本部のあった太原に派遣されたが、その際に身体をこわし、さらに中国南部の作戦に隊長としてかり出され結核を悪化させた。すでに呼吸困難を来している大橋の姿を見て、正松は、戦争のむごたらしさ、おろかさをかみしめたという [22]。

日本人は、北京の西に集められ、そこから鉄道に乗り塘沽まで行き、さらに船で帰国の途に着いた。

小千谷への帰還

そして、翌1946年船は佐世保に到着し、小千谷には5月12日に日本に到着した。

帰国後は、新潟医科大学薬理学教室助手を経て、1948年(昭和23)米子医学専門学校助教授に就任するが、間もなく結核のために入院する。翌1949年(昭和24)4月に退院して、福島県立女子医学専門学校生理学教室教授に就任した。翌年、女子医専は昇格して福島県立医科大学となり、1951年(昭和26)にその生理学教室の教授となった。しかし、再び結核を発症し、翌年まで入院を余儀

なくさせられるなど、病との苦闘は続いた。

回復すると、1961年(昭和36)から1963年(昭和38)までドイツのフランクフルトのアム・マイン大学と米国のオハイオ州立大学に出張し、積極的に研究を行った。その在外研究をきっかけに、アUELバッハの神経叢から活動電位を取るという発想が生まれ、1966年(昭和41)独自に開発した電極を使って、それに成功することとなる。この研究について正松は次のように述べている。

アUELバッハ神経叢の電気生理学的研究は、なされていなかった。私はこの神経叢の顕微鏡下の美しさに驚き、ぜひとも、ここの電気的現象を記録しようと考えた。悪戦苦闘の結果、家兎小腸の律動的文節運動(rhythmic segmentation)の発生時に小腸表面から漿膜、縦走筋を貫いて、微小金属電柱(白金イリジウム)の先端をアUELバッハ神経叢にあて、その活動電位を記録し、その成績をPfluger Archivに発表した [23]。

正松の研究は、世界の生理学者を刺激し、その後の神経叢の電気生理学の隆盛の礎を築くこととなった。生理学者の辻繁は、正松を腸管電気生理学の創始者と呼んでいる [24]。

停年退官後も、正松の生理学への関心は旺盛で、1979年(昭和54)より米国のロヨラ大学とパリ大学の招聘を受け、在外研究を行っている。米国シカゴのロヨラ大学医学部教授のノース博士は、正松が停年退官することを知り、共同研究者として大学に招聘したのだった。ノースは当時30代半ばで、正松とは親子位の年の差があった。

停年退官後の第二の人生をどのように歩むか、正松には、福島周辺の私立大学からの招きもあった。また、アフリカのガーナにある野口英世記念研究所の責任者として赴任してくれないかという要請もあった。しかし、正松は、自分の研究を継続できるノースの申し出を選択したのだった [25]。

反核運動

帰国後、1983年(昭和58)に「核戦争を防止する福島県医師の会」を立ちあげ、その世話人代表

となった。この会は、「核戦争を未然に防止するという人類の悲願達成のために、医師の立場から積極的に世論を喚起し、恒久平和に貢献することを目的とする [26]」ことが規約に謳われている。

翌年の1984年(昭和59)には、福島市内の諸団体が連帯する「反核福島市民の会」が結成されるが、その代表世話人に就任している。福島市は1986年(昭和61)2月1日に核兵器廃絶平和都市宣言を行う。その宣言文は、「日本国憲法の平和主義の精神に基づき、〈非核三原則〉を堅持していくことを強く希求し、我が福島市域においては、いかなる国のいかなる核兵器も配備貯蔵することはもとより、飛来・通過することを拒み、核兵器の廃絶・軍備縮小と世界の恒久平和の実現を願う」と謳っている。このような自治体の動きは、市民運動に大きく支えられていた。

彼は、70歳を過ぎて核戦争防止のために物理学の勉強を始めた。反核を訴える講演会では、黒板に核分裂と核融合の数式を書き、物理学の偉大な発見が結局は原爆、水爆の開発につながった人の世の矛盾、愚かさを嘆いた。「核にかかったら、医師が1つの命を救うために行っている行為は靴磨きみたいなものです。1つ間違ふとこの素晴らしい地球が無になってしまうのですから。だから核をこの世から無くさなければならない」と訴えたという [27]。

1992年(平成4)、79歳で死去するまで、平和反核運動と生理学研究への熱意は衰えることがなかった。

生体実験命令を可能にしたもの

正松はなぜ生体実験を拒否することができたのだろうか。ここでは、彼の人格形成の中で実験拒否に影響を及ぼしていると思われる点を抽出してみたいと思う。

第1に、彼は、多感な少年期に、収穫の半分を地主の所にペコペコしながら持って行く父の姿に、制度の矛盾を感じたという [28]。そのような農村での貧しさの中で苦学し、さらに重ねて病気と闘うという苦難を味わう。それが、「貧しい人のための医者になろう」という強い使命感の源泉と

なっている。社会の矛盾に疑問をもちながらその是正を希求する気持ちは、演劇や文学の愛好ともどこかで関連していたと思える。

第2に、恩師川村麟也の存在である。多額の研究費という甘い蜜で誘われても、人道に反する実験を拒否した川村自身の警咳に接したことが、直接的には彼に大きな影響をおよぼしたと考えざるを得ない。非人道的実験はいかなる条件下でも行わないことが、研究者の義務であると、川村は教えたのである。

対照的に、京都帝国大学医学部生理学教室教授正路倫之助は、731部隊長石井四郎の要請もあり、当時講師であった吉村寿人を満州に派遣した。敗戦後帰国した吉村に対して正路は、「自分は、石井部隊で何をやっているかをうすうす知り乍ら、厭がる君を無理矢理満州へ送り、しかも今日のような事態を迎えて、君や君の御家族の生命に危険が及ぶ所迄追いつめた事は自分の大へんな誤りであった」と謝罪したという [29]。正路は731部隊内における非人道的実験の内容を知りつつ弟子を送り出していたことがわかる。

第3は、中国人との交流である。北京大学内での限られた交友関係ではあったが、正松にとって中国人は敵国人ではなく、寛大で親切な人たちであった。

一方、731部隊では、捕虜の人格を無視するために「マルタ」と呼び、通し番号で区別して匿名化していた。

デーヴ・グロスマン (Dave Grossman) は、戦闘員度同士、あるいは殺戮者と犠牲者との心理的距離が増大すると、攻撃性が増大すると言う。その心理的距離こそが、相手に対する共感を消し、人間である相手から心理的に離脱することが、破壊的攻撃の決定的な要因であるとする。この現象が起きるには、複数のメカニズムが関わっているが、それは、以下の4点に分類される。

1. 文化的距離 = 人種的・民族的違いなどで、犠牲者の人間性を否定するのに有効。
2. 倫理的距離 = みずからの倫理的優越と復讐/制裁の制裁を固く信じる心理。
3. 社会的距離 = 社会的に階層化された環境にお

いて、特定の階級を人間以下とみなす慣習の生涯にわたる影響。

4、機械的距離=手の汚れない〈テレビゲーム〉殺人の非現実感のこと。機械的な緩衝物が介在することによって、犠牲者が人間だということを忘れることができる [30]。

このグロスマンの説を援用すれば、中国大陸に送りこまれた日本軍将兵の多くが、1と2の心理的距離を多かれ少なかれ持っていたと考えられる。中国人は劣等民族であるとの意識 (= 文化的距離) と、正義の皇軍は無謬であり、「暴戾な支那人を膺懲する」のだ、あるいは戦友を殺されたのだから復讐をして当然だ、という意識 (= 倫理的距離) である。当時、このような心理から自由であることが、いかに難しいことか想像に難くない。特に捕虜に対して、日本軍は、国際法を無視した処遇をし、どうせ殺される存在であると見ていた。したがって、抵抗できない状況にある捕虜に対して、軍医は、どうせ殺されるのなら、生体実験や生体解剖に使用して役立てるという心理も働いていた。

一方、中国人の教え子と良好な親交をもち、中国語を学ぼうとした正松は、中国人に対する心理的距離が小さかったのではないかと考えられる。

おわりに

正松の生体実験拒否から何を学ぶか、これが後世の我々の課題であろう。当然のことながら、人命を尊重し、非人道的な実験を行わないために生命倫理観の涵養が必要で、生命倫理教育も重要視されなければならない。

さらに、人種・民族差別をしない人権感覚を身に着けることの大切さも指摘できよう。人権感覚は生命倫理観の中に重要な位置を占めると考えられる。

そして、人種・民族・文化の相互交流によって差別と偏見を無くし、相互理解をすすめることが求められる。

しかし、この2点を個人が備えていれば、医学研究者は、非人道的な実験から自由になることができるかといえば、そう断言はできない。なぜな

ら、戦争状況にあつては、個人の倫理性のみでは限界があるからである。

正松は自分が生体実験をせずに済んだことを幸運だったと思っていた [31]。彼は、自分の人生を振り返り、さらに反核を訴えて次のように述べている。

かつて私も戦争反対の気持ちはあっても、戦争体制に立ち向かって反対することもできず、召集令状を拒否することもできなかった。軍隊内では人体実験は拒否したが、所詮は奴隷であった。日本を、世界を広島・長崎の惨禍に落とそうとする政治が行われるならば、敢然として権力者に立ち向かい闘うつもりである。

戦争中、権力に対して批判することができなかった反省をふまえ、晩年は反核運動に邁進し、医師としての良心を貫こうとした。彼は、新聞に「SDI 研究に参加するな」という文章を投稿し、SDI (Strategic Defense Initiative, アメリカの戦略防衛構想) のための研究に日本が参加することに反対した。その文章には人生の体験に裏付けられた考えが明快に示されている。

人類の歴史の中で初めて原爆の被害を受けた日本の政府はいかなる思想あるいは経済上の利害得失から (SDI に…末永) 参加しようとしているのか。日本の政治家に深い省察を期待する。私は日本政府だけでなく、米、ソ連その他の諸国の政治家にも訴えたい。「人を殺すことをやめましょう。自分の国が1番正しく立派であると考えをやめましょう。この緑の地球を死の世界にするのをやめましょう。核兵器を廃絶して下さい。核をやめればSDI など要らぬ」と [33]。

当時反核運動に対する批判には、共産党の指針に則ったソ連擁護の運動であるという種のものであった。しかし、その批判は、党派を超えて連帯を呼びかけた正松には的外れなものであった。

ここでの正松の論点は2つある。

第1に彼は、決して人を殺してはならないという位置に立っていた。絶対的な生命の尊重である。この主張を彼は、「ヒポクラテスの誓い」を敷衍し



横山正松：「SDI研究に参加するな—核廃絶は被爆国の願い—」『毎日新聞』1986年，8月21日，朝刊。

つつ展開した。彼によれば、誓いは「命を尊重せよ。いかなる圧力があっても人を殺すな。人を殺すことに智識を貸すな」と解釈されるのである。

近現代における戦争は、「戦争に協力する科学者がいなければ戦争はおこらない」といわれるように、戦力＝軍事科学力の側面が色濃い。彼は、SDI研究に携わる科学者に、自分の過去を重ね、「人を殺すことに智識を貸すな」と呼びかけたと考えられる。

この立場は、いかなる状況下でも殺人を認めないもので、「戦争という状況下に人が殺されるのは仕方がない」という立場とは、まったく相容れないものである。

第2点目は、自己の大義の正当化を各国がやめるように主張していることである。自己の正当化は、敵を有罪であると決めつけ、罰か復讐を以て臨むという態度をとらせるのである。そして、相手を殺すことは正義の執行であるという合理化を可能にしてしまう。

では、「自分の国が1番正しく立派であると考えること」ではなく、何を意図したらいいのか。正松は書いていないが例えばそれは、他国と対等関係に立つということにつながる。国家間の力の強弱に関わらず、他国に対して対等な他者として敬意を払うことを述べたかったのではなかったか。

以上の2点は、絶対的な生命の尊重と他国との対等関係の保持ということに要約できる。

正松は、自身の体験をふまえ、戦後の冷戦を憂慮し、この根本的な主張を日本社会に投げかけようとしたのであった。

この主張は、冷戦期を過ぎてなお、未だ人類が解決しえない課題として、そして恐らく多数の人々の悲願として存在し続けている。

(本稿は、拙稿「生体実験を拒否した生理学者横山正松」(日本医学史雑誌 54 (3) p.239-248, 2008年)を大幅に改稿したものです。敬称は略しました。また、横山正松夫人の横山ムツ様より聞き取りをさせていただき、また資料の提供を受けましたことをここに感謝いたします。)

文 献

1. 横山正松：「若い日の私」『毎日新聞』1986年9月11日朝刊。
2. 北京市政協文史資料研究委員会（大沼正博，小島晋治訳）：岩波書店，1991
3. コリン・ロス：『日中戦争見聞記』講談社学術文庫，pp 187, 2003
4. 辻 繁：腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出。ミクロスコピア 10 (2)：26, 1993
5. 横山ムツ：「正松との五十年」横山哲夫編『いいじ正松』私家版。pp4, 1994
6. 横山正松：「若い日の私」『毎日新聞』1986年9月11日朝刊。
7. 1944年4月1日～9月30日の報告，防衛研究所図書館所蔵。この資料は、西野瑠美子：「北京甲1855部隊の検証」『季刊戦争責任研究』9号，1995年，p.46-53頁で紹介されている。
8. 西野瑠美子：北京甲1855部隊の検証。季刊戦争責任研究 9：49, 1995
9. 中央档案馆，中国第二歴史档案館，吉林省社会科学院編：日本軍北京駐屯細菌部隊にかんする衛生部陸世* (火+良)の状況調査，証言細菌作戦，同文館，1991年，p.24-26。および，同：「天壇防疫処の中央人民政府衛生部あて報告書」，『証言細菌作戦』同文館，1991，p.27
10. 西野瑠美子：北京甲1855部隊の検証。季刊戦争責任研究 9：51, 1995
11. 高嶋伸欣：マレー・シンガポールの細菌戦部隊—北京の細菌戦部隊を含む日本軍秘密部隊の実態—。季刊戦争責任研究 2：49, 1993
12. 中国における同部隊研究の専論はすべて，北支那防疫

- 給水部は、細菌部隊であったと規定している。例えば、謝忠厚：「華北甲 1855 細菌部隊之研究」『抗日戦争研究』2002 (1) 期, 2002 年, 徐勇：「侵華日軍駐北平及華北各地細菌部隊研究概論」『抗日戦争研究』2002(1), 2002 年, 謝忠厚・謝麗麗：「華北 (甲) 1855 部隊的細菌戦犯罪」『抗日戦争研究』2003 (4), 2003 年など。
13. 陸上自衛隊衛生学校編：『大東亜戦争陸軍衛生史 1』陸上自衛隊衛生学校, pp 604, 1971
 14. 横山ムツ：「正松との五十年」横山哲夫編『いいじ正松』私家版, pp5, 1994
 15. 横山正松：アンケート回答, 鄭州 BO 会報 36 : 6, 1985
 16. 池田 弘：走馬灯, 鄭州 OB 会報 19 : 12-14, 1982 なお, 鄭州 BO 会は, 元北支那防疫給水部鄭州支部・開封出張所・新郷出張所・連雲港檢疫班に所属した者によって戦後作られた戦友会である。
 17. 防衛庁防衛研修所戦史室：『戦史叢書北支の治安戦<2>』朝雲新聞社, pp 478-523, 1974
 18. 横山正松：停年退職を前にして, 仁五会誌 28 : 2, 1978
 19. 横山正松：停年退職を前にして, 仁五会誌 28 : 2, 1978
 20. 横山倫太郎：「祖父について」横山哲夫編『いいじ正松』私家版, pp63, 1994
 21. 横山正松：アンケート回答, 鄭州 BO 会報 36 : 6, 1985
 22. 横山正松：アンケート回答, 鄭州 BO 会報 36 : 6, 1985
 23. 横山正松：誰にもわかり筋道が通っていること, ミクロスピア 10 (2) : 27, 1993
 24. 辻 繁：腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出, ミクロスピア 10 (2) : 26, 1993
 25. 横山正松：シカゴから, 仁五会誌 29 : 1, 1979
 26. 核戦争を防止する福島県医師の会規約, 核戦争を防止する福島県医師の会ニュース 2 : 1, 1984
 27. 「講演会 ペンの行方」『Times いわきインターネットニュース』1997 年 10 月 9 日号 <http://www.iwaki.co.jp/Times/index1009.html>
 28. 辻 繁：腸管電気生理学の創始者横山正松先生の思い出, ミクロスピア 10 (2) : 29, 1993
 29. 吉村寿人：『喜寿回顧』, 吉村寿人喜寿記念行事会, pp 317, 1984
 30. 『戦争における【人殺し】の心理学』ちくま学芸文庫, pp 262-289, 2004
 31. 戦後横山は妻に「俺は殺さないでよかった」と言っていたという, 横山ムツ：「正松との五十年」横山哲夫編『いいじ正松』私家版, pp5, 1994
 32. 横山正松：暑い日に思うこと, 仁五会誌 31 : 6, 1986
 33. 横山正松「SDI 研究に参加するな—核廃絶は被爆国の願い—」『毎日新聞』1986 年, 8 月 21 日, 朝刊。